

新婦人しんぶん

新日本婦人の会目的

- ☆核戦争の危険から女性と子どもの生命をまもりまします。
- ☆憲法改悪に反対、軍国主義復活を阻止します。
- ☆生活の向上、女性の権利、子どものしあわせのために力をあわせまします。
- ☆日本の独立と民主主義、女性の解放をちとります。
- ☆世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてまします。

今週の紙面

- 2面 ニュース/国会
- 3面 読者/まんが/詩、俳句
- 4面 のびのび体操/ホットライン
- 5面 憲法講座
- 6面 第68回国連女性の地位委員会/国会傍聴記/母の歴史
- 7面 新婦人のページ/主張/はじめての自宅介護



新日本婦人の会は国連に認証されたNGOです

認知症になっても 安心して生活できる社会に

65歳を過ぎると5人に1人が認知症になると言われています。「住み慣れた家が過ぎてしまった」「認知症になっても穏やかに暮らしたい」——そのために必要な介護や支える制度の課題について、「ケア社会をつくる会」世話人で、埼玉・新座市で介護事業を展開している小島美里さんに聞きました。

高齢者問題は女性の問題

NPO法人「暮らしネット・えん」を20年以上前に立ち上げ、いま、ケアアラン事業、訪問介護、認知症デイサービス（通い）、ショートステイ（泊り）・デイサービス・訪問介護をなじみのスタッフで行う小規模多機能型居宅介護、グループホーム、グループリビング（高齢者生活共同運営住宅）、配食サービスなどを展開しています。

いまの社会、女性は賃金も年金も低く、夫が亡くなったなら生活費が激減し、高齢の単身女性の4割は貧困です。高齢者問題は女性の問題です。多くの人が、健康で長生きしてポツクリ逝きたいと思っていますが、ピンピンコロリが、できるのは3%くらいです。平均寿命は延びても、どこか健康を失って支援が必要となる期間は、男性9年、女性は12年です。

「妻は何歳まで夫の食事を作り、家事をしろうというのか」とある集会で出た発言ですが、本当にそうだなと。妻は、90歳を過ぎて、夫が亡くなるまで、女（妻）の役割を引き継ぎ、90歳になれば物忘れもひどくなり、

「暮らしネット・えん」代表理事
「ケア社会をつくる会」世話人

小島美里さん



「この地域で、生協や教育問題の活動、市議会議員もしていたつながりで協力をいただき、ここまでできています」と話す小島さん

こじまみさと 1990年から障害者介助ボランティア活動、その後介護事業をスタート。2003年NPO法人「暮らしネット・えん」を設立。小規模多機能型介護事業やグループホームなどを運営。著書に『あなたはどこで死にたいですか？』（岩波書店）、『おひとりさまの逆襲』（上野千鶴子と共著、ビジネス社）など。

95歳になって認知症がまったくないという人は珍しい。認知症の症状は人それぞれですが、多くはゆるやかな進行ですから、そう慌てることはありません。

認知症対応になっていない制度

最初は、ケアアランの相談から訪問介護やデイサービスを、そして認知症が進んできたら、小規模多機能、グループホームなど、その人に合わせてつなげていきます。

客観的に見て必要でも、自分からすぐにデイサービスやショートステイを利用したいという人は、ありません。ある女性は、「親戚の子を預かっている」と断っていました。その子は、人形に服を着せた「ボクちゃん」。しばらく訪問介護を利用したあと、「ボクちゃんも連れて行きますよ」

せん。症状に合わせて必要なサービスを相談できます。地域の中でこれだけあったらなんとかなるのでは」との思いで事業をひろげてきました。

よ」と誘って、デイサービスにくるように。彼女は「ボクちゃん」を隣に座らせ、お茶などをスプーンで口に当てて子どものように世話をしています。しばらくして、ケアマネージャーが、「あら？ ボクちゃんって人形じゃない？」と声をかけると、「そうよ」って。

え？ わかっていたの？」と思いましたが、最初から「人形でしょ」とは言えないし、彼女もそう答えなかったでしょう。職員との人間関係ができたからこそです。家ではガスを止めて事故がおこらないようにし、ショートステイもできる小規模多機能型に移った時には、「ボクちゃん」は連れてこなくなりまし。

もし夫や親がデイサービス



配食サービスへの要望も多い



緑に囲まれ、家庭的な雰囲気のある事業所（小島さん提供）

ビスなどに行きたがらなくても、ケガや病気、家族の事情などをきっかけに、高齢者は受け入れ、変わります。介護のプロは、うまく誘導してくれるので、相談できるつながりをつくっておくことが大切です。

認知症の人のための在

訪問ヘルパーがいなくなる

すでに介護の現場は、ヘルパー不足で介護保険が利用できない事態に陥っています。ヘルパーの平均年齢は54・7歳、60代が3割で、80代のヘルパーが、自ら尿漏れ対策の紙オムツを当てて訪問する事態も生まれています。地域を回っている訪問ヘルパーは酷暑でも嵐でも雪の日でも、自転車やバイクで利用者宅を訪ね、移動時間がかかるので1人で多くは回れませ

ん。最期まで自宅ですべてでも、ヘルパー不足でこのままでは「住み慣れた家が最期まで暮らす」ことはむづかしくなると思います。

要介護認定も年々厳しくなると、背中も曲がり持病のある90歳の女性が要支援2で、「せめて買い物と床掃除を」と申し込んでも「要支援に対応するヘルパーはいない」と断られているのです。

5月4日号は休刊です

